

MOCTION における浦幌木炭の展示と

明治大学との共同研究に関する報告

杉並学院高等学校非常勤講師 月岡 忠

1. はじめに

「Moction」は、公益財団法人東京都農林水産振興財団が運営する国産木材の魅力発信拠点で、新宿パークタワー内に位置する。本稿は、2025年5月8日から6月3日にかけて同施設で実施された「浦幌木炭」の展示について、約半年間の準備過程と、浦幌木炭および明治大学水野勝之ゼミによる共同フィールドワークの成果を報告するものである。

2. 展示の経緯と目的

本展示の申請準備は2024年末より開始された。申請手続きは、過去にMoctionでの展示経験を有する土居拓務氏、本田知之氏の支援を受けて進められた。本展示の主な目的は、製品販売ではなく、木材関連業者や林業を専門とする学生など専門性の高い来場者に対し、浦幌木炭、浦幌町の取り組み、そして明治大学との共同研究内容を広く周知することに置かれた。

3. 展示内容と準備体制

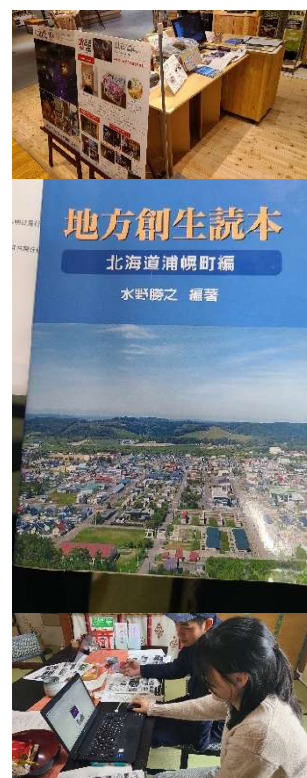
3.1. 展示物

展示は、浦幌木炭の主力商品である「木炭」と、「道の駅うらほろ」等で販売され好評を得ている「飾り木炭」を主体とした。また、浦幌町の地域おこし協力隊である「にわた」の森亮氏が手掛けるヤナギの枝を活用したコースターやランタンなども展示構成に含め、計画を具体化した。



3.2. 準備体制とプロセス

準備期間が大学の春季休暇と重なり、学生による継続的な支援の確保は困難な状況であった。その中で、2024 年 12 月に浦幌町でのフィールドワークに参加した杉並学院高等学校卒業生の本多真理が、準備支援の中心を担った。明治大学水野勝之ゼミは、展示会場（東京）と産地（北海道浦幌町）とを繋ぐ調整役を担うとともに、ポスター、リーフレット、アンケート作成といった後方支援を中心に担当した。各制作物の担当は、ポスターを本多と月岡、リーフレットを月岡、アンケートを土居とし、作業を分担した。展示直前の 4 月 30 日から 5 月 1 日にかけて、水野、本多、月岡が浦幌町を訪問し、最終調整を行った。電子メールでの情報交換は常時行っていたものの、細部の調整においては対面での協議の重要性が再確認された。特に、ポスターデザインは、当初メールでのやり取りで承認されていたが、対面での議論を経て全面的に再構成する方針となった。結果として、森と本多の協力により、質の高いポスターが作成された。また、アンケート回答者への謝礼として、水野勝之編著『地方創生読本 北海道浦幌町編』を進呈する準備も進められた。



4. 展示の実施と結果

4.1. 会場設営と会期

会場設営は、休館日である 5 月 7 日（水）に行われ、水野と月岡が浦幌木炭の代表として、会場スタッフの指示のもとで作業を実施した。最終的なレイアウト調整ではビデオ通話システムを活用し、遠隔地にいながら円滑な意思疎通を図ることが可能であった。展示は 5 月 8 日から 6 月 3 日までの約 1 ヶ月間にわたって開催された。平日には木材・林業関係者が、休日には家族連れなどが多く来場した。会期中には、東京大学森林科学専攻の学生 15 名、東京造形大学の学生 10 名の団体見学があり、水野と月岡が解説を担当した。

4.2. 来場者の反応

来場者から寄せられた意見や質問としては、木炭の消臭効果とその持続性に関するものが最も多かった。次いで、「飾り炭」をはじめとする展示品の価格や購入方法に関する問い合わせも多く、浦幌木炭の製品自体への関心の高さが示された。明治大学水野ゼミが提唱する、浦幌木炭を基軸とした観光ツアーの構想についても、多くの来場者が関心を示した。製品に関する具体的な提案もあり、一例として「家庭での BBQ 利用時に、着火を容易にするための火口（ほくち）用小割炭を同梱してはどうか」といった意見が寄せられた。

会期中は、水野ゼミの3、4年生および都留文科大学の本多も会場での解説を担当し、来場者に対してフィールドワークの成果を発表した。これは学生にとって、自らの研究活動を社会に発信する実践的な経験を得る貴重な機会となった。5月26日には、浦幌木炭株式会社代表取締役の背古円が来場し、自社製品の展示状況を確認した。

5. 考察と今後の展望

北海道浦幌町と明治大学水野ゼミによる地方創生の取り組みを、日本の木材・林業の情報発信拠点である「MOCTION」で発表できたことは、大きな成果であったと評価できる。会期中には浦幌町出身者や所縁のある人物も多数来場し、地元からは「東京での展示は素晴らしい」といった応援のメッセージも寄せられた。本展示が、浦幌町への関心を高め、将来的な観光誘致に繋がる一つの足掛かりとなる効果が期待される。また、主力製品である木炭だけでなく、「飾り炭」の認知度を高められたことは、今後のマーケティング戦略を展開する上で有益な示唆をもたらした。

今後も明治大学水野ゼミとの共同フィールドワークを継続し、浦幌町の地域創生に関する研究を深化させていく予定である。